

新海洋法時代に



宇田道隆

(海洋学者)

米、ソ、加、仏など大国が二百海里排他的専管水域実施に踏み切って、一九七七年の春から日本漁業の前途が今さらのように問題になり、蛋白食糧の供給不安から早くも値上り気配さえ見せている。

土地利用計画では最初から当然念頭にあるはずなのに全く無視して強行するような風潮が戦後特にひどかった。そのため日本の山河は戦

一九七六年十二月―七七年三月の寒冬は米大陸で異常な厳しさを示し、農産にも影響が大きく現われるとなると、極東日本にも深刻に反映する。

これまで世界中の海を日・ソなどがわが物顔で席捲し開拓していった業績は目覚ましいが、一面乱獲の不安をかき立て、発展途上国など自国地先の資源を将来のために確保しようと二百海里の縄張りを唱え出し、また強いナシヨナリズムに駆りたてる動機にもなった。しかし、元々終戦後トルーマン(米)の大陸棚宣言に続くラテンアメリカの二百海里管理宣言が先行し、一九五八年以来国際海洋法会議で海洋分割の方向が推し進められて来たからだ。

海の生物資源を開発して来た漁業はその機械的高効率によって戦後年々数パーセントずつ漁獲生産高を増して世界全体で七千万トン、日本は一千万トン程度にまでなった。ところが最近数年はもはや横ばいというか、停滞気味になり、鯨や底魚、マグロ類などに獲り過ぎが問題になり、国際的規制は強化される一方になった。人口は相変わらず世界的に増大しているのに食糧の方が伸びないので不安が次第に濃くなって来た。農業の方も近年気候が著しく不順、不安定になって来て、冷害、寒波や旱ばつで不作となると、日本のように自給率四割といった国は輸入の先き行きが案ぜられる形勢になり、あと二、三十年も

かぶせるだけになる。中間パイプを太くすっきりさせる合理化で解決できるであろう。漁業の資源管理保護は食糧確保開発の大前

寒冷気候期になる予想では食糧不足が深刻化する形勢となった。

産業文明の発達と経済的發展によるいろいろな資源の陸上での枯渇から海底、海中の資源の開発に真剣となり、マンガン団塊(銅、ニッケル、コバルト、マンガン)を豊富に含む)の深海底資源を争って採掘する形勢が先進国間に濃くなり、後進国は「人類共有資源として自分たちにも恩恵を分かち与えよ」と強く要求し、海洋法会議でモメている。石油、天然ガスなどの化石燃料資源は間もなくあと三十年ぐらいで枯渇を予想されている。エネルギー資源を原子力でという声も最近では賛否が相半ばするありさまで、事故や放射能汚染などの不安が強まる一方、熱汚染(温排水)の悪影響が解決し難い問題になって来て、前途は暗い。

とにかく環境の汚染と破壊が最近二十年ぐらいい間に世界中で物凄く進んで、便利や高効率や見かけの繁栄を手放して喜ばない世界的な反省時代はいり、省力エネルギー時代、廃棄物の資源化再生利用時代に入った。日本はまだ浮かっている。

海洋の利用の激しい反面、環境保全の特にヤカマシイのは沿岸水域である。特に河口水域、内海、内湾では多面的な利用の競合関係があつて、その管理が大問題となっている。日本など漁場、養殖場が以前から存在し、埋立や廃水などでその悪影響をかぶるから国

粉組合せなど各国民嗜好食品を案出し、スリ身化などにするとよい。海のエネルギーは、豊富な未利用の太陽エ

エスプリ

専ら大規模な開発を遂げ、一九七〇年代の末から日本漁業の前途が今さらのように問題になり、蛋白食糧の供給不安から早くも値上り気配さえ見せている。

土地利用計画では最初から当然念頭にあるはずなのに全く無視して強行するような風潮が戦後特にひどかった。そのため日本の山河は戦争が過ぎてからGNP増大に伴って荒廃してしまった。入浜権の訴えられている高砂海岸がよいモデルで、かえって封建時代に、潮干狩や花見など住民の行業福祉に長年深い配慮を払っていた先祖の偉さが最近の調査報告で見事に立証された。海辺を中心に従深十キロぐらゐの全国的な精査をこの高砂の例にならって行うことが却って日本の沿岸地域の多面的利用の基本計画基礎資料を「急がば廻れ」式に早く入手することになるであらう。要するに美観、景観、生活快適度を考えて、人間を含む動植物の生態系を守り、それに立脚したプランをたてることである。昔の人は生活の知恵でそれが安定のとれた永続的なやりかたであることをちゃんと知っていた。自分たちの生活の本拠、基盤を大切にしたいのだ。日本人は何時の間にか近視的な落ち着きのない目前の利益だけに眩惑される人種に変質したのであろうか？ 長期的見透しに欠けての右往左往は、オイル・ショックや二百海里の米、ソ宣言などすべてそれを見せる。二百海里時代の到来はこれまでの行詰りを打開し、悪弊を一新する好機である。

漁業界でも流通体系をすっきりさせなければ魚価の値上り（入漁料や合弁方式や燃油、餌代などから避け難い）を消費購売者の方に

害、寒波や早ばつで不作となると、日本のように自給率四割といった国は輸入の先き行きが案ぜられる形勢になり、あと二、三十年も

かぶせるだけになる。中間パイプを太くすっきりさせる合理化で解決できるであらう。

漁業の資源管理保護は食糧確保開発の大前提から世界的に順守し実行されるべき鉄則である。日本の沿岸、近海漁業振興に力が注がれ、二千億円を投じて七十年間に漁礁地帯を沿岸に造成する計画があるが、海洋汚染を改善しなければムダに終るのは明らかである。大雨ごとに道路工事とか宅地造成とか山野を切り刻んで緑の植生を失ったため、泥砂を流出させ、海底を荒廃させている今の状況が続くかぎり、魚介業を育てることに役立たない。海中の生態系は陸に住む人間の眼には映りにくい。潜水調査をしなければよくわからない。人工漁礁帯の効果も追跡調査しなければムダ金に終る。モジャコ乱獲し十倍も餌イワシをくわして海を汚すハマチ養殖などよくない。

沖合漁場、海外漁場の開発には日本の若い人々が積極的に魅力を感じて参加する体制が要る。国際的協力体制も内容のある、裏付のある漁業協力、人材交流を基地に航空輸送を用いる能率的科学化によって進められよう。

現地人を併せ現地国利益を考えた方式、集団漁業戦法、船団方式など衆知を集めてやればうまく行くであらう。オキアミやイカ、タコ、イワシ類や未利用の深海魚族（サメなども含む）、海草資源もあるが、現在投棄している、屑魚類の活用など積極的に考慮し、濃縮魚類蛋白（FPC）をスープもとやパン

あつて、その管理が大問題となっている。日本など漁場、養殖場が以前から存在し、埋立や廃水などですぐその悪影響をかぶるから国

粉組合せなど各国民嗜好食品を案出し、スリ身化などにするとよい。

海のエネルギーは、豊富な未利用の太陽エネルギーとこれに由来する海水温度差、風力、波力、関連する海流、天体引力による潮汐など、日本周辺でも発電に利用でき、永続的でもあり無公害である。このほか地熱利用発電、有機物の微生物分解によるエネルギー、海水塩分差によるエネルギーなどある。水素エネルギーの形にし、輸送、配給などに利便である。

海水の淡水化は同時に海塩とその成分を抽出できる。海水の利用では小都市の飲料水源にできる。海は人類にとって未来の活路であるが、四面海の日本人にとっては特にその感を深くする。気候、気象の予測も海気相関の理によるほかはない。

新海洋法の時代に日本は自らを正し、誠意を尽して他の国々と交わるべきである。日本は明治時代に文教に欧米の御雇教師群を迎え、捕鯨にノルウェー人砲手を雇用するに高給を以てし、修得するやこれらに代った。ペルリの黒船が開国を求めて来日したとき米國捕鯨が日本近海を荒した。因果は巡り、日本が立ち場をかえた今の時代である。世界の海洋で日本が喜び迎えられる存在となれば人為的な縄張りなど問題でない。道義の日本に立ち帰ることが未来の活路となるのだ。

（うだ みちたか 東海大学教授）